

れば、我身を二つに別けて此世に遺し置くと同じければ、死せし後の事思ひ置く事なし、狂げて罷上りて行末よきに計ふべし。と色々にかき口説ければ、郎等泣く／＼領掌しぬ。さらば疾く上れよとて、其儘出立ぬ。其言葉の如く、明日の軍に四陣利なかりしかば、左近さん／＼に戦ふて父子共に討死しぬ。(老談一) (言記)

石田三成常に云ふ、奉公人は主君より取物を遣ひ合せて残す可らず、残すは盗人なり、遣ひ過して借錢するは愚人なりとぞ。(老人雑話)

元忠鳥居氏伏見城主が茶道に神崎竹谷と云ふ者あり、既に伏見城破れ元忠最期の時、大勢の中に魁入散々に切て廻る。敵兵折重り、遂に是を生捕て注進す。石田、竹谷を召出して伏見城始終の事を具に問ふ。元忠が忠信の類ひ無きを聞き、甚是を感ず、且竹谷に向て云、新太郎忠政、父が戦死の有様左こそ覺束なからめ、急ぎ汝關東に下り合戦の次第を忠政に語るべし。と即命を助け、剩へ傳馬に乗せて東國に送る。忠政彼が物語を聴て、亡父の忠死の潔きを知り、討死する家士等の妻子も皆最後の體を聞く事を得たり。

鳥居元忠、松平家忠、松平政近の首大阪に渡る時。各議して云、元忠は是内府に代り上將の權を執る、剩無双の忠死を遂げたり、家康の命に替り没したるの志豈感ぜざらんや。と禮を厚くして、公卿臺に居ゑて京橋口に鼻す。爰に元忠恩顧の吳服所、京の町人佐野四郎右衛門、此由を聞きて急ぎ大阪に至り、番人を賺して元忠が首を盗み取、終夜京に走歸り、幸我弟僧に成て百万遍の寺中に住居す。彼が許に行て語らひ、密に葬て深く收む。其後元忠が首を盗める者を求め搜し、大阪及京の町々近邊の郷村へ觸廻して穿鑿す。佐野是を聞て外より顯はれたらんは口惜しかるべし、忍び逃べきに非ずと自ら石田が家に行き其の罪を白て刑を請ふ。三成却て佐野が節義の勇に直なるを感じて、宥して之れを歸す。(以上二話、鳥居家中興譜)

治部少輔生捕られたる時、紺の帷子を着て、小手を免されたり。藤堂宮内來て、某は治部少の恩を受けたる者なれば、一目逢度逢て望まる、故に對面を許す。宮内扱々と云ふ、治部少宮内もイヤ／＼、最早何事も云はぬ物といふ。扱三人(石田、小西、安國寺)へ時服一重宛、臺に載せ被下候。小西は一時の寒風を遣れよとて小袖被下辱存候、諸人に對面、扱々面目なし、身に刀を立てぬ宗旨故如此見苦敷目に逢ふと云ふ。安國寺は小袖を見て夫れ着シヨと云て着用す。諸大名に逢ふても無言なり、疵を痛むと見えたり。石田は小袖を見て、是はトヨからと云ふ。上様からと云ふ。上様とは、いや内府様の事なりと云ふ。

石田切々上様は此中御他界なされたるに、早や内府を上様と云ふ事よと計りて、小袖を着せず、諸大名に逢て雑言をいふ。(武功雜記)

石田三成生捕られ、京都に於て誅せらる、日、途中にて湯を乞ひしに、其邊に無かりしにや、警固の者、湯は求め難し、唯喝かは愛にあまほふし(也)を持合せたり、是を喰はれよ。と云ふ、三成聞て、其は痰の毒なり、食すまじと云ふ。警固の者笑ひて、只今首を刎ねらるゝ人の毒断は、可笑き事なりと云ふ。三成曰く、汝等如き者の心には尤の了簡也、大義を思ふ者は首を刎ねらるゝ期迄も命を惜むは、何卒本意を達せんと思ふ故也、燕雀鴻鵠の志を知らざるに同じと云ひしとかや。(老話記)

本多上野に御預けの節、治少は腹中瀉下とて、食も左のみ進まず、晝夜寐ねて御入候由、本多中務見舞に被參、治少に御逢候時、かしくまり兩の手をつき、治節少輔殿、御分別違ひ、其體に被成候と被申候得共、治少何の挨拶もなく、寐ねて被居候由。(坂坂卜實覽書)

石田に繩を懸け、大津へ被越候節、各大名家物番より御覽候處に、筑前中納言殿被仰候は、治部少輔憎き仁に候間見ばやと被仰候と、長岡越中守殿御申候は、不入儀に御座候由申候へば、何に憎き者候間見可申と被仰候て御覽候處を治部少輔見付被申候て、日本國中に筑前中納言程比與成侍有間敷候、内股膏藥にて候と散々悪口被申候由、中納言殿御年二十一にて若く御座候故、後悔なされ、其れより勞を病むと世間にて申し候。(校合雜記)

世の所謂慧巧奸邪の小丈夫たる治部少輔石田三成は、其を迎ふるには、其の領土の半を割くをも惜まず。義を揚ぐるには、其の敵人の罪を宥すをも憚からず。將た其の失意幽囚の究境に在る時と雖も、談笑自若として意氣毫も損する莫かりしと、實に以上記述する所の如しとせば、彼の所謂慧巧奸邪なる者も、亦た太だ尊重し欽慕すべき英雄の好資格たる莫らむや。雨夜燈前、史を繕きて卒然感慨の生するあり。敢て二三の零話を蒐録し、題して「治部少逸話」とは云ふ也。

雜 録

「偉人史叢」の名聲江湖に告ぐ

浮華淫靡の文字流行して一代の氣風漸く柔情に傾く時に當り弊房編輯に憤慨する所あり古人の中に就き其言行の最も俊逸卓異にして觀感の跡ある者を採擷し文壇新進の士と相謀りて初めて偉人史叢第一巻を發刊せしは實に去年春二月上旬なり。爾後月を閉する二十餘。卷を追ふ亦た二十餘而して毎月毎卷讀書社會の歡迎を被り江湖の喝采を博せざるは莫し弊房已に以て之れを榮と爲す而かも今や計らざりき偉人史叢は長も乙夜の闇に入る嗚呼是れ豈に當に著者と弊房との名譽にして止まんや實に我が著作界出版界の光榮にして史叢中に收載せられたる偉人烈士も應に泉下感泣・天恩の枯骨に及べるを幸恐謝すべし……(興華房主人敬白)

「高山彦九郎」の延刊を謝す

余の高山彦九郎公刊を江湖に約せるは、本年初秋にあり、爾來筆を練り思を構ふるに、數月に滯れども、校梓激越なる彦九郎の精靈未だ筆端に上り來らず。茲再今日に至る、江湖に貢ぐこと多し、

然れども寧ろ江湖に貢ぐも、泉下の熱狂男兒に貢ぐこと能はざるものあり。乃ち筆を更めて稿を起し、明治卅一年の歲端に於て、讀者に見えしむることなせり。江湖の諸子幸に余の疎拙を咎むること莫く、寧ろ余の疎拙を以て、彦九郎の如き熱狂男兒を傳するの苦心を諒せよ……(長田偶得記)

「織田信長」に就て

拙著「織田信長」前編「陣好」の部(七十七頁の初行)信長、好きて唄へりしてふ小謡「死なうは」定じのひ草には何なしと「死なう」は「このよ」(歌)の誤り。又後篇の巻頭「織田公家殿の解」に「此銀子の十まい御りたし候へ候の御りたし候へ候は」は「御りたし候へ候」の誤りなり。此外魯魯馬の誤植は紛らさずと雖も以上は餘りに甚だしき者なれば、コトに是正して「信長」の讀者に謝す云……(三申比丘)

偉人史叢 天覽 威教 既刊書目

Table listing authors and titles of the 'Great Men Series' (偉人史叢). The table is organized into two columns. The left column lists authors such as 長田偶得 (Nagata Otodoku), 林 子平 (Hayashi Shuhei), 蒲生 君平 (Fuzushige Kunpei), 伊藤 仁齋 (Ito Nisai), 平野 國臣 (Hirano Kunitake), 平賀 源内 (Hirahata Gen'ei), 大曾 弁八郎 (Osoe Hachiroemon), 高田 屋嘉兵衛 (Takada Yajibei), 河 樂翁 (Kawabata Rakuon), and 加藤 清直 (Katagami Kiyonori). The right column lists authors such as 足立 栗園 (Adachi Rikuen), 新井 白洲 (Shinai Hakushu), 水野 起龍 (Mizuno Kikiryu), 田 信長 (Tanaka Nobuchika), 木村 泉 (Kikumoto Izumi), 小田 眞清 (Ogoda Makichika), 藤 重蔵 (Fuji Shuzo), 柳 聖保 (Yanagi Seiho), 山田 武正 (Yamada Takechika), and 山田 光秀 (Yamada Mitsuhiko). Each entry includes the title and the number of volumes (e.g., 全二冊).

德齋原義先生著 宋 米芾先生題字

第壹集儒者之部

先哲後傳

唐紙摺明和裝美本
肖像印譜四十頁插入

正價金參拾錢郵稅四錢

掲載目次

藤原惺窩	林羅山	林讀耕齋	石川丈山
中江藤樹	山崎闇齋	熊澤蕃山	伊藤仁齋
伊藤東涯	中村惕齋	貝原益軒	新井白石
三輪執齋	荻生徂徠	太宰春臺	服部南郭
安藤東野	山縣周南	平金澤	宇佐美濤水

徳川氏三百年の間、鴻儒哲士の輩出すること少からず、其當時にありては、治教を裨補し、文化を教吹して、以て民心の嚮ふ所を知らしめ、其死後にありては、風節激勵して、後人の觀感に資せり、もし歴史的研究するときは、今日の休明も、亦此等鴻儒哲士の餘澤に負ふ所なしと謂ふ可からず、夫れ其人の徳望功澤を慕ふときは、其性行事歴を知らんと欲し、其風彩容貌に接せんと欲するは、常の情なり、而かも年所を歴るの

久しき、圖像の類も、往々湮滅に歸して、復た求む可からざるに至る、豈に憾か可きの至りならずや、世に徳齋原義氏編する所の先哲像傳あり、藤原惺窩以來碩學の肖像并に著書目錄を輯め、詳略宜しきを得、先賢の面目鬚眉を窺ふに便なるも、板本甚だ稀れにして、篤志者の需めを充たすに足らず、弊房こゝに慨する所あり、今回その原本に基き且つ、**眞蹟鑑定**の便に供する爲め、**鍍石印譜**と集載して、精巧なる印刷に附し、以て弘く篤學の諸君子に頒つことなせり、卷中收むる所の肖像は徳齋氏の原圖に基き、**健筆の名聲藉々たる青年洋畫家、和田英作**氏の揮毫に係れば、出藍の妙趣ありて、生彩奕々、覽猶原本收むる所は、享保寶曆時代に止りて、其以後に及はず儒學者に止りて、國學者洋學者に及はざれば、弊房更に諸大家に請ひ續集を編して、其缺を補ひ、以て三百年間の文運を徵知するの料と爲すべし、江湖の諸君子請ふ一本を購ふて、坐右の珍寶とせられよ、
第二集國學者之部 近刻

特約所

寶文軒

吉岡平助

同

樂善堂

長崎次郎

同

金華堂

川瀬代助

同

文求堂

田中治兵衛

發行元

裳華房

芳野兵作

大阪東區備後町四丁目四十八番屋敷
肥後熊本市新町二丁目
尾張名古屋市本町三丁目
京都市上京區四條北寺町通
東京日本橋區本町三丁目十三番地

○辭世 不識庵

我一朝榮一盃酒。四十九年一醉間。
生不知死亦不知。歲月只是如夢中。

極樂も地獄も共に有明の

月そ心にかゝる雲なき

新年初摺の高山彦九郎には京都御所と皇城と重橋の光景彦九郎自筆の

江戸日記と京日記の寫眞版を附呈す

7
4

006480-000-6

73-42

上杉謙信

得能文/著

M31

ACK-0178

